

生の現象学から生きることの形而上学へ
 ——メルロ＝ポンティと共に——

From Phenomenology of Life to Metaphysics of Living
 —with Merleau-Ponty

DALISSIER Michel *

“Das Rätsel ist gerade die Selbstverständlichkeit”¹⁾

緒論：問題の現象学的な提起

生とは一体何か。人々は、「それは自明である (selbstverständlich)！」と信じているかもしれないが、この生の自明性自体は謎である。生は、哲学的問題を表している。哲学を論じる場合、我々は何よりも先ず、生の現象について述べるのが自然であると思われる。それは、生が如何にして我々に現れてくるのか、という問題である。これを取り上げる学問を、E. フッサール以来、生の現象・学と呼ぶ²⁾。むろん、生の現象学は、生の哲学に関連し³⁾、感覚の現象学⁴⁾、感情の現象学⁵⁾、肉の現象学⁶⁾として発展するが、本論の主題はむしろ、生の現象学の特性や独自性は何か、という部分に注目する。

本論は、フッサールによる晩年の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』に焦点を絞ってから生の現象学の考察に向かう。第一に、ここでの現象学の意味とは何か。それは、元々学問以前ないし学問以外の生活⁷⁾に還る使命を帯びるが⁸⁾、逆に言えば現象学は、科学を基礎付け⁹⁾、その活動に適用

* 金沢大学准教授

される、という学問である。例えば、現象学的に生きられた時間は、数学的の時(変数 t)とは違うが¹⁰⁾、臨床心理学上の治療法の具体的な状況に適切な時間概念を表すものである。

では第二に、生はどのように現れるのか。生は、我々を取り囲み、生かすもので、世界的生(Weltleben)となり¹¹⁾、我々が「そこに生活して行く」世界となる¹²⁾。この世界は「我々の共同体の生活」、生活環境世界(Lebensumwelt)¹³⁾として描写できる。中でも、真なる¹⁴⁾科学の世界¹⁵⁾は、例えばロボット工学の世界は、生活環境世界の内に現れる。従って、包まれている世界から包む環境世界への帰還が必要となるのである。この内面性は、臨床現象学¹⁶⁾等にとって有意義であると思われる。

それでは、どのような意味で生はある種の世界を表すのか。

生活(としての)世界・生世界(Lebenswelt)

現象学は、先に述べた世界を、生活世界ないし生世界(Lebenswelt)¹⁷⁾と呼ぶ。生活世界についての考察は、デイルタイがすでに予想していたものであり、フッサールの論題となり、またハイデggerにいたって、現存在の分析論に変貌するのである。それはまた、シェーラーやA.シュッツ等から批判的に取り上げ直され、そして後で見ると、メルロ＝ポンティによって奪回された、という歴史でもある。ちなみに、フッサールの生活世界の特徴は何処にあるのだろうか。

1. 生活世界は、Lebenの世界として「究極的に能作している生活」を含意する¹⁸⁾。

2. 生活世界は、「生きること」(leben)、「体験」(Er-lebnis)の世界として¹⁹⁾、「生きられる世界(monde vécu)」(メルロ＝ポンティ)を表す²⁰⁾。

3. それはまた、生活と体験についての意識の世界と見なされている²¹⁾。

4. 生活世界は、「皆のための世界」、「主観的-相対的」と特徴付けられてい

る²²⁾。

問題は、あたかも我々が二つの仕方では生活世界を生きられるかのように見える、という点にある。現象学者にとって世界についての自然的な態度 (natürliche Einstellung) とは、世界を内面的に生きるという構えである²³⁾。ここで、フッサールは次のような区別をつけている。

A) 我々は、世界に「入り込んで生きる様式で」、「世界確信のうちに」、素朴的に生活世界を生きてゆくのである²⁴⁾。

B) あるいは我々が「反省的態度」において、生活世界を生きるのである²⁵⁾。それでは、この区別を検討してみよう。

「生活世界の存在論 (Ontologie der Lebenswelt) という問題

A) 生活は、自然的態度において一つの世界であり、この世界が科学の諸前提以前に存在し、「純粋な経験」²⁶⁾において「一つの存在論の主題」²⁷⁾となる。換言すれば、科学以前に存在する生活世界を論じる学問は、おのずと存在 - 論になる訳である。ただ、それはどのような存在と存在論であるのか。順番に、この存在論の実践、根本原理、方法論、対象を手短に取り上げよう。

1) 先ず、生活世界の存在論の実践、いわゆる形相的還元 (eidetische Reduktion) は、「事実に与えられた世界の想像的変様」に対応する²⁸⁾。世界は、想像上の不変項として、「空間時間という世界形式のなかで、二重の意味で (空間的な場所と時間的な位置に従って) 「局所的に」配置されている事物、つまり空間時間的な「存在者」の全体である」²⁹⁾。この存在論は、『イデー・ン』が語る「質料的な形相的な学 (materialen eidetischen Wissenschaften)」に対応することが分かる³⁰⁾。

2) 次に、生活世界の存在論の根本原理は、いわゆる「一切の諸原理の原理」である。だが、ここで表明されない最上の原理としては、「肉体的現実性 (leibhaften Wirklichkeit)」への言及があるが、生そのものへの言及はそこ

では登場しない³¹⁾。言い換えれば、肉体的現実性は、生きている現実性 (lebendige Wirklichkeit) のようなものとは一致しない。

3) 生活世界の存在論の方法論は「生活世界的な判断中止」(die lebensweltliche Epoche) であり³²⁾、まだ生活世界についての判断中止ではない³³⁾。この判断中止は三つの形態を持つが、本論ではこの点を脇に置こう。つまりそれは、3.1) 科学に関する判断中止³⁴⁾。3.2) 真理に関する判断中止³⁵⁾。3.3) 関心に関する判断中止³⁶⁾。

4) 終わりに、生活世界の存在論の対象とは何か。フッサールによれば、この存在論は、世界の不変の構造³⁷⁾を吟味している。例えば、世界は必然的に物 (Ding) を包括する。数学では空集合 (\emptyset) があり、仏教によれば実在の本質は空であるかもしれないが、現象学に空の世界はない。

生活世界の存在論と生の現象学

問題は、生の現象学と存在論を同一視することができるかどうか、という点にある。それらを同一視できないと仮定して、四つの反論を呈示しよう。

1. フッサールによれば、不変の構造は Leben よりも Welt に関わる。しかし、生世界には生命の不変構造もある。例えば、生命は死を本質的に含意している、ということに関連する構造等である。それとは対照的に、フッサールは如何にして死の意味が与えられているか、という方面に焦点を絞る³⁸⁾。

2. 広義の生活世界には、無生物 (石³⁹⁾、ロボット等) が入るが、それらは生の現象学に対応し、生命性 (Lebendigkeit) を含む狭義の生世界には入らない。後で論じるように、ハイデッガーとメルロ＝ポンティは、フッサールよりも生命体 (le vivant) と呼べるようなものの現象学を試みる。

3. 逆説的なことに、『生活世界 (Die Lebenswelt)』という分厚い草稿記録には、生 (Das Leben) についての考察は乏しい。フッサールによる本書の副題の表明、『前所与的世界の解釈とその構成 (Auslegungen der vorgegebenen

Welt und ihrer Konstitution)』が⁴⁰⁾、その傾向を表してゐる。つまり、本書の本題 (Die Lebenswelt) にある「レーベン」は、副題のところで「ヴェルト」と「構成」に変貌し、生命に関する問題は、世界的且つ構成的な問題の方に集約される、ということになる。実際、同書第二篇の比較的短い断片のみがレーベンに捧げられているだけである⁴¹⁾。

また、我々はここで中期フッサールの『厳密の学としての哲学』でなされた説明を思い出すべきである。つまり、「普遍的な精神生活」が、「生活経験」、人生の急迫事としての世界観 (Weltanschauung) における生活ということになると、世界観は「世界観と人生観もしくは単に世界観」ということになってしまう。世界観には本来の精神の生が隠れているから、世界の次元は生命のある次元に先立つことになる。よって、生活世界が何よりも先ず前所与的-世界であると同様に、世界・人生観は何よりも先ず世界-観になる⁴²⁾。

一言で言えば、生活世界は生活であるよりも世界である。そのうえ、生活世界は、生活の世界としてよりも、志向的で永続的な運動⁴³⁾として記述され、最終的に生活の世界としてよりもドクサの世界として定義されている。フッサールは次のように述べている。「この生活世界は、単純で伝統的にあまりに軽蔑によって処理されている $\delta \acute{o} \xi \alpha$ の世界に他ならない」⁴⁴⁾。更に、生活世界にある生活は、このように記述された世界において、すなわちこのような志向的で永続的な運動においてしか考えられない。「この生活は人格的なものとしてたえず発展を目指す志向性のうちでのたえざる生成である」⁴⁵⁾。

以上の理由から、フッサールにおける生活世界は文字通りには世界に過ぎないことがわかる。

4. 最後に、このような生活世界に対して、もう一つの反論が可能である。フッサール自身が認めているように、この存在論は「極めて粗削りな相対的意味で」物事を理解し、故に生の内実も把握できない、という制限を認めざるを得ない⁴⁶⁾。

それでは、生活世界の存在論から離れると、生の現象学はどうなるのか。そうすることによって、フッサールは生活世界の生、それ自体の特殊性を認識することができるのか。おそらくそうではない。

生への還元 (Die Reduktion des Lebens)

B) フッサールは、「超越論的判断中止 (transzendente Epoché)」⁴⁷⁾ によって、存在論とは別の学問を試みていた。それは、「あらゆる構成作用のただひとつの究極の機能中枢である絶対的われ (エゴ) へ還元する」⁴⁸⁾ 学問である。ここで、Ego とは構成軸であり、構成 (Konstitution) とは意味付与 (Sinnggebung) の操作として捉えればよい⁴⁹⁾。

例えば、自然体としての柳は、まだ無意味で燃えるものであるが、私にとっての「柳」の知覚は最初に意味を持ち、燃えないこととして現れる⁵⁰⁾。

さらに、還元を通じて、生活世界での生き方は変貌してゆく⁵¹⁾。その変貌はまた、ある種の超越として見なされる。フッサールによると「われわれはそれによって、普遍的な意識 (個別主観的なものと相互主観的なもの) を越えた態度をとる」⁵²⁾。哲学的態度は、生活世界の与えられた事実から、その与えられ方自体を問うことに移行する⁵³⁾。還元後の世界は、観察者の課題として、「本質形式 (Wesensformen)」⁵⁴⁾ で構成されるようになる。例えば、物は本質的に空間に現れる⁵⁵⁾。

併し、この反省的で超越論的態度においても、生の現象学は疑問の対象になる。

1. レーベンの深意は、還元が行われた後で把握できる⁵⁶⁾。従って、還元する以前には、生活世界のレーベンは意味を持たない、という難点がある。

2. 還元後は、そのままの素朴な自然的態度に帰還することはできない。この態度を単純に理解することは可能である。つまり、「つねに自然態度にもどる (zurückgehen) ことはできる」が、「古い素朴性をとりもどす (erlangen)

ことはできないのであり、それを理解できるだけだ」⁵⁷⁾。その意味で、「いまはもはやすでに素朴なものではないにしても、やはり自然的な態度への帰還」がある⁵⁸⁾。ただ、生活世界を研究することが可能⁵⁹⁾な職業・使命 (Beruf) のみが残る。そのことによって、「心理学者として、世界の基盤におのれの仕事を引き受けるという職業の変更によって、ふたたび自然的態度へ還る」可能性のみがある⁶⁰⁾。

3. 生活世界は、「単なる現象」、「超越論的主観性のうちの単なる「構成分」⁶¹⁾ となってしまうので、生活世界自体の独創性を喪失する傾向がある。

4. 生活世界は、一切の生活の基盤 (Boden)⁶²⁾、存在論の前提を表したのに⁶³⁾、還元後、意識生という基盤への手掛かり (Leitfaden)⁶⁴⁾、または「指標 (index)」⁶⁵⁾ 以外の何もでもない。言い換えれば、本当の Boden は、超越論的主観性となる⁶⁶⁾。では、この基盤に根付く生とはなにか。

超越論的生 (Das transzendente Leben)

生活世界生の還元が、以上述べたようなレーベン、この世界を構成する「純粋な意識の生」⁶⁷⁾、エゴ的で間主観的⁶⁸⁾な「たえざる「世界構成」をおこなっている超越論的生」⁶⁹⁾へと導くことは興味深い。

このような純粋意識 (reine Bewußtsein) の純粋性は議論の核心になる。純粋意識は、もはや生活世界の場所である「普遍的な意識生活」ではない⁷⁰⁾。フッサールは「判断停止」(エポケー)とは、言わば根本的で普遍的な方法であり、これによって私は自分を自我として、しかも、自分の純粋な意識の生をもった自我として純粋に捉えることになる」と述べている⁷¹⁾。従って、現象学的還元は、生活を純化するものである。言ってみれば、超越論的生は、生活世界の生活にくらべてもっと純粋である。

とはいえ、このアプローチは忠実な生の現象学の視点からすると、議論的になるであろう。

1. 生は死を含む筈であるにせよ、超越論的生が不死であることは理解しがたいものである⁷²⁾。また、「ヨーロッパ的人間性の危機と哲学」という有名な講演の末文を思い出そう：「精神のみが不滅なのである」(Die Geist Allein ist unsterblich)⁷³⁾。死を知らない精神は、死を本質的に含んでいる生について語る権利はあるのか。

2. 加えて、超越論的生において肝心なのは、生活世界の時空ではなく、超越論的生の奥にある、自己構成するエゴの生き生きとした(lebendig)時間性⁷⁴⁾、また、「自我主観の生の本領をなすいきいきと流れる志向性」となる⁷⁵⁾。フッサールは、構成の視点から、「生活世界の生き生きとした現在とその生き生きした過去」(Die lebendige Gegenwart der Lebenswelt und ihre lebendige Vergangenheit)を考察する⁷⁶⁾。例えば、我々は記念や行事などを通じて、我々の記憶と歴史を作っていくと言える。

生は、世界の永続的な運動、且つ超越論的流以上に、哲学者の間主観的な歴史⁷⁷⁾、「理性の活動的生」⁷⁸⁾を意味する。つまり、生は志向的發展、ないし生く・往く・行くことになってしまう。ただ、それは全体を通しての生の忠実な現象学に値するのか。

3. フッサールは驚く。還元は「我々に対して全ての自然的な世界生活(Weltleben)を閉ざした」と。彼の解決は次の異様な(befremdliche)成果にとどまる。「自然的、客観的な世界生活は、たえず世界を構成しつつある生、すなわち超越論的生のある特別な仕方に過ぎないということこそ、判断中止における研究成果、すなわち異様ではあるが、しかし明証的であってわれわれのいまの省察によって究極的に解明されるべき研究成果なのである」⁷⁹⁾。異様に思われるのは、自我の生とそれを先立つ原自我(Ur-Ich)⁸⁰⁾の生が、「無量」⁸¹⁾であっても、本当に全ての生活を構成できるのか、という点にある。フッサールは述べている。「この問題はむろん、結局すべての生命体——それらが間接的にでも証明されうるような仕方で、「生命」といったふうなものを、また精神的意味での共同生活をもっているかぎり

——を包括する超越論的問題の領域にまでおよんでくる」⁸²⁾。それは、フッサールが静態的現象学から発生的現象学へ移動したことに関るが、ここでは詳論しない。

4. 確かに、新たな生は「生活全体の完全な態度変更、すなわち徹頭徹尾新たな生のあり方」を含意する⁸³⁾。また、「世界を意識しながらも、これとはまったく異なる目覚めた生き方がありえる」⁸⁴⁾。当然見出される相違点は別として、ベルクソンにおけるように⁸⁵⁾、そこには生の両義性がある。また、道学的に言うなら、生活と超越論的生は、生の両儀ないし生の地と生の天である。しかし、このような区別を通じて、生自体の極意が明らかになるのだろうか。取りも直さず、生活と超越論的生を区分した上で、生そのものの意義は現れるのだろうか。

結局のところ、生は普通の現象なのだろうか。なぜなら、生は、出発点と到着点にある構えに現れ、さらに自然的態度から反省的態度へ移りゆき、死んだ上で甦り、生き続けるという意味で、再び現象するからだ。つまり、「柳は生き物だ」という判断に現れる生は、再び判断する私の生に現れる。生き物（柳）の定位を還元できる（柳の意味）が、生から解放できないので、あたかも生は現象学の要素、ないし前提を表していたかのように見える。現象学は、あらゆる前提を一掃しようとするが⁸⁶⁾、もし「自らの最上の正当化である」⁸⁷⁾とすれば、それは自体自身が生きていることを、つまり自らの生を前提としている、と言っても誇張ではない。そうすると、いかにして現象学はこの生を把握できるのか。

様々な生の現象学

(die Phänomenologien des Lebens/les phénoménologies de la vie)

フッサールと共に、生の第一の意義（A）を、その第二の意義（B）に還元することによって、生の現象学を論じ尽くせるのか。この問題を掘り下げる

現象学者たちには、少なくとも四つの「行動」⁸⁸⁾がある。本講義は、その4つめを中心に考察する。

1. ハイデッガーは、有限的な事實的生 (faktische Leben)⁸⁹⁾ (宗教的であれ⁹⁰⁾)、及び生物などのような⁹¹⁾ 解釈学⁹²⁾ を試みた。しかし、一方では、生の解釈は、生という現象を取り上げるよりも、その意味を探究する。他方では、ハイデッガーが語る思索 (Denken) は、生の現象学にとどまらず、それどころか形而上学を批判した上で、現象学そのもののある意味で見捨てた、ということもある。元々、存在論は、正に生き物として不明である現存在、その分析論という形でしか根本的にならない。畢竟、彼は現象学を通じて、根本的存在論 (Fundamentalontologie) から、存在のトポロジーないし存在場所論 (Topologie des Seyns)⁹³⁾ へ移動したことは明らかである。とはいえ、彼はそうすることによって、生の現象学を見失ったのではなからうか。故に、現象学は、生の解釈学以前に、生という現象に戻らなければならない。

2. M. アンリと共に、逆に現象学はあまりに生命に没入した結果、そこから抜け出せない、ということになる。生とは、エゴの自己構成を越えて、感情の現象学、また生物学的な自己限定 (self-determination)⁹⁴⁾ の中心にある、生活世界にある単純な触発⁹⁵⁾ ではないような「自己触発」として定義できる⁹⁶⁾。

ただ、この永遠の生命は、それ自体の内存在性に閉じこもり、生の本来的な表現性、外在性、時間化を消え失せさせ⁹⁷⁾、神格化されてしまう。神は、「絶対生 (vie absolue) の自己触発」であり、それにおいてキリストを生む、ということになる⁹⁸⁾。そうすると、自己触発は真に何かを、もしくは誰かを感じ且つ生きることとは異なってしまふ、ということになる。

3. 或いは、レヴィナスにいたって、倫理学は生の現象学と倫理的な生 (ethical life)⁹⁹⁾ からの逃走を命ずるとも言える。生は、自己触発よりも、精神的生命による一切の意識的で表象的な把握から脱し、他人における「無限者の命」、彼女且つ彼の秘密的な体験のようなものに包まれている¹⁰⁰⁾。ただ、こ

の他者における生命を生きるというのは容易ではない。あたかも他人は、倫理の要求に応じようとする我々に、生を盗むかのように見える。

生の現象学の彼方へ (au-delà de la phénoménologie de la vie)

4. なお、メルロ＝ポンティは A と B、世界的生活と超越論的生との関連という問題に関して、1) 現象学的、2) 存在論的、3) 形而上学的、三つの解決法を提案する。

4.1 第1の解決法は、自然的態度と超越論的態度の間に、継起よりも相互基づけ (Fundierung) の連結を探究する試みにある。つまり、構成すること (konstituieren) が必要なので、前者は後者の内に残るが、逆に構成するもの (Konstituierende) が不可欠なので、後者は前者を免れない、という結びつきがある¹⁰¹⁾。例えば、確かに我々による世界への帰属のあらゆる客観性は構成されているが、同時に、我々は「肉体的間主観性」として、「それぞれの身体によって同じ一つの世界に所属する」、ということになる¹⁰²⁾。

逆に言えば¹⁰³⁾、全てを理解できる透明で全体的反省という能力があれば、それは既に生活世界を四方八方に構成していた筈であろう。そうすれば、フッサールが主張している世界へ還る運動の^{可能性}は、ひいてはその必然性すら¹⁰⁴⁾、もはや無くなってしまう。

4.2 メルロ＝ポンティによる第2の解決法は、第1の解決法を明確にし、生活世界を「究極の存在様態」¹⁰⁵⁾と見なし、その必然的な存在論を打ち企てる。フッサールによれば、科学から生活世界への帰還、並びに生活世界から自我への還元のみが不可欠であるが、生活世界への帰還 (Rückgang/retour) だけでも^{可能}である。メルロ＝ポンティによればむしろ、ヴェルト (世界) とレーベン (生) を再発見する (reconquête) ^{必要}がある¹⁰⁶⁾。

繰り返して言えば、フッサールの考えでは、もはや素朴的ではなく反省的になった「自然的な態度への帰還」が可能である¹⁰⁷⁾。とはいえ、メルロ＝

ポンティの目からすると、自然そのもの自体への有益な帰還、つまり世界と生活の内実ないし存在を再び捉え、それらを存在させる必然性がある。

しかし、このメルロ＝ポンティによる企てには、判断中止ないし還元の意義を見失う傾向があるのではないか、という反論を呈示できるだろう。ここには疑う余地がある。この企てはむしろ、可能的な帰還を必然的な再発見に徹底化し、還元の意味を変質し、ひいてはそれを掘り下げる (Reduktion→réduction) ことにある。また、この理論は、自然の哲学¹⁰⁸⁾、応用現象学¹⁰⁹⁾、人生の現象学¹¹⁰⁾ 等に関して、有意義な帰結をもたらすと思われる。

4.3 第3の解決法は、第1の解決法と第2の解決法を紹介した際に生じた運動、すなわち相互基づけと再発見を明示する。それは、先に述べた二つの態度、それらの間に現れるある種の矛盾を生きること、というような振る舞いに対応する。メルロ＝ポンティは次のように述べている。「フッサールは、彼の最後の哲学においては、いかなる反省も生きられた世界 (Lebenswelt) の記述に立ち還ることから始まるべきである、ということ認めている。しかし (mais) 彼はこれに付け加えて、第二の「還元」によって、生きられた世界の諸構造もそれはそれで、世界のすべての暗みが解明されてしまうような、普遍的構成の超越論的流れのなかに戻し置かれねばならぬ、と述べている」¹¹¹⁾。ここで、メルロ＝ポンティは、「しかし (mais)」という等位接続詞に関する問題を取り上げる。上記のテキストにおいて彼は、反対するものは矛盾しているということ力説する (第一の還元・第二の還元、生きられた世界・超越論的流れ、記述・構成)。とはいえ、この矛盾の生き方は、自然と自我、生活と生等のような「概念間の無気力な矛盾」¹¹²⁾ を前にしたフッサールの感じたような驚きではないのである。

豊かな矛盾 (contradiction féconde)]

上述のことを道学的な言い方で纏めてみれば、生活と超越論的生の区別

は、生の両儀として、生の地と生の天のような区別ないし差別よりも、生の陰と生の陽、生の陰陽のような関係であるとも言える。第1に、生は生の両義ないし両儀の間に循環することを表現する。それが故に生は、生活と超越論的生という二つのものや意義よりも、生きるということにある。第2に、生の陰陽は、生の陰が生陽に現れ、生の陽が生陰に基づく、というような弁証法的な運動を表すという意味で、矛盾的存在であると言える。第3に、生きることが生である、且つ生が矛盾的存在である、という二つの前提からすると、結論は、生きることは矛盾を生きることである、ということになる。

メルロ＝ポンティにとって、矛盾を生きること (vivre la contradiction) は、現象学の二次的なテーマではなく、フッサールが提起した根本的な問題、つまり主観生への構成の可能性の問題、この問題への解決の道に他ならない。この問題は、次のような矛盾を来す。私は、「他者の方を構成者として、私が彼を構成するまさにその作用自体にたいしてさえも構成者として、構成することになる」、すなわち私は私を構成する他者を構成しなければならない、という矛盾の絆である。この問題を事実上解決するために、第一に、この矛盾に驚いた上で、この「根本的矛盾を無視する」方法がある。「私が他者の観念をもっているからには、何らかの仕方で、上述の困難は事実上で乗り越えられたわけだ」という逃げ口である。ただ、そうしてしまうと、私と他者の差異自体がなくなる。というのは、「もし彼がそれ[根本的矛盾]を無視するとすれば、彼はもはや他者とは関わりをもたぬとなってしまいうから」である。

従って、この問題を機能という点から解決するために、第二に、他者を知覚する者は次の能力を持たなければならない。つまり彼は、この矛盾を認めた以上、「この矛盾を、他者自身の現存の定義そのものとして生きることができる」という能力が必要である。つまり、解決は矛盾を生きるという機能ないしなすこと (faire) にある。「構成する者として機能している (fonctionne) ちょうどそのときに自分を被構成者として体験するこの主体、これこそが私

の身体なのである」¹¹³⁾。この過程においては、驚き・無視・事実ないしなされたもの (fait) という段階から、認識・生きる・機能ないしなすこと (faire) という段階まで、二段階があることを念頭に置くべきであろう。

では、この矛盾の生き方とは何か。なぜ二段階があるのか。この問いかけへの回答は、「人間における形而上学的なもの」という重要な論文にある。それは、自然と自我、生活と生のような概念間にある論理的な対立を生き抜き、これらの間の相互基づけの拠り所である、「人間的意識の豊かな矛盾 (contradiction féconde)」¹¹⁴⁾ を生きることを表している。例えば、意識は透明性と不透明性という反対組をなしている論理的な対立を乗り越え、それらを互いに基づける往復運動を積極的に生きるのである。メルロ＝ポンティは「構成がこの世界のいくらかを取って置き、したがって世界からその不透明性を決して奪わない」¹¹⁵⁾ と述べている。構成は、世界を照らし、それを隈なく捜し回ろうとしている。というのも、世界には、未知や無知等の暗い領域と側面があるという現象が現れるからである。しかし、なぜ世界は暗いものであると主張できるのか。それは、世界において構成の照明が見えるからである。

この矛盾は、透明・不透明のみならず、主観・客観、精神・物質、絶対・相対等、論理的に互いに言い争う対立組 (contra-diction/contra-dictio)、ましてや自家撞着のような行き止まりを表現しない。豊かな矛盾は、『韓非子』に述べられているような解けない謎以上に¹¹⁶⁾、日本語を借りて言えば、矛と盾のような衝突、存在論的且つ実在的に争うものの中に、実行中の創造的な競争を示唆する。この競争は、死までの戦争ではなく、生きるための挑戦として、「互いに相手によって生きているこれらの反対物」、直訳すると「互いに生かせるような反対組 (ces contraires, qui vivent l'un de l'autre)」¹¹⁷⁾ という意味での言わば生き生きとした矛盾 (contradiction vivante) である。例えば、メルロ＝ポンティは、中期と後期のフッサール哲学を峻別するよりも、この哲学の矛盾的自己制作・調整を追跡しようとした。

彼は、パラドクスを執り行う意識を次のように特徴付けている。「現象学的反省」が、「開示せねばならないのは、言活動（パロール）があることを成立せしめている所以のものであり、（中略）語り了解するという主体のもつパラドクスである。（中略）現象学的反省とは、現に在る事物の秩序を吸収する他の順序へと移行することではもはやなく、それはまず何よりも、現にある事物のなかに私たちが深く根を下ろしていることの、より一そう鋭敏な意識のことなのだ」と¹¹⁸⁾。

なお、このような脇目もふらずに矛盾することを生きる意識は、心理学的且つ精神分析上の意識ではなく、また単に現象学的意識にとどまる訳にはいかない。それはむしろ、先に述べた論文に紹介された「形而上学的意識」¹¹⁹⁾に接近するのである。それはなぜか。

形而上学的意識 (la conscience métaphysique)

なぜ矛盾することを一心不乱に生きることは、ある種の「意識 (conscience)」という形をとるのか。どういう訳で、ここで人間の見識があるのか。如何にそれは「形而上学的」なのか。その解答は、「人間における形而上学的なもの」という重要な論文に見出されうる。それは、この矛盾を生きることがある種の認識 (reconnaissance) に対応するからである。このような認識は何についての認識か。メルロ＝ポンティは、それが生の認識であると主張する。形而上学的意識は、何よりも先ず生の意識である。

「このあらゆる過去や現在の生を活気づけ、それらの生から全生を受け取っているところの個人的生についての認識、一いっさいの期待にそむいてそれらの生から我々に向かって生じる光—についての認識こそが、形而上学的意識である」¹²⁰⁾。

ここで、メルロ＝ポンティが述べる生とは何か。それは、「個人的生」であると同時に、前代と現代の生であり、「あらゆる過去や現在の生を活気づける」のであるから、それは普遍的生である。この普遍性は、論理的な普遍性に比べて、いわゆる「側面的普遍性 (universalité latérale)¹²¹⁾」であることは、本論では省略する。ここで重要な点は、この同時性には既に、生の生き生きとした矛盾が生じる、ということである。

加えて、この生き生きとした矛盾は豊かである。それはなぜか。

一方では、個人的生は時間を超越して、「あらゆる過去や現在の生を活気づける (anime)」、前時代や同時代の生、つまり生そのものに魂 (anima/âme) を与える、生に生命を吹き込む、ということになる。それはもはや、エゴの生き生きとした (lebendig) 不可逆的な時間性の流、生活世界の生き生きとした延長を持つ現在ではない。それは、逆に言わば生を「生き生きさせる」こと、ひいては生を生きさせる (animer) ことである。

他方では、個人的生は、「それらの生から全生命を受け取っている (reçoit)」。この操作は、今を受け取る主体の方から見ると、受け身になるが、何よりも先ず、受け取られる相手の方から見ると使役となる。逆に言えば、それらの前・同時代の生は、この個人の生を生きさせる、ということになる。

この受動・能動的ないし中動態上 (diathesis)¹²²⁾・中動的生に弁証法が立ち現れる。つまり、「生きさせる (animer)」とは、自分自身で何か且つ誰かを生きさせると同時に、他者自身の生きさせることを受け取り、ないし生きるがままに委ねる (laisser vivre)、生きさせられるということになる。言い換えればそれはまた、生を与えること (donner la vie) と同時に、生が生それ自身を捧げる限り、自己自体を与える限り、フランス語で言えば生を受け入れること (l'accueillir en ce qu'elle se donne) である。

従って、いずれにせよ矛盾の豊かさは、この使役、つまりこの「させること」に由来する。実際、生が生を生きせしめるということは、メルロ＝ポンティの形而上学の中心概念、つまり存在させる (faire être) ことに対応する。

生は、生を生・活かすとは、生きることである。

そして、この生を生きることとしての生、この生きること自体についての認識は形而上学的意識である。ここまでの認識は、生という方面から知覚した認識は、生の認識として、生を生きingことを意味する。

形而上学的に意識すること

だがしかし、このような形而上学的意識は、二つの「程度」を持つ。そこでは、認識のあり方が深くなる。意識は、生 (vie) についての認識から「なすこと (faire)」についての認識に変貌する。上述のテキストは、次のように続いている。

「それは〔形而上学的意識〕、その第一程度においては、反対するもの対立を発見する驚きであり、その第二程度において、為すこと (faire)の単純性においてそれらの同一性を認識することである。形而上学的意識は、日常経験、つまりこの世界、他人達、人間的な歴史、真理、文化といったもの以外のいかなる対象ももたない。しかし、形而上学的意識は、それらの対象を、前提なき帰結のように、またそれらが自明であるかのように、完全に為されてしまったものとして捉える代わりに (au lieu de les prendre tout faits)、形而上学的意識は、私にとって、それらがもつ根本的な奇妙さ、それらの出現という奇跡を再発見するのである」¹²³⁾。

すでに以前の論文で、この形而上学的意識の二つの程度を紹介したので、本論ではそれを詳論することは避けたい¹²⁴⁾。考察を行わなければならないのは、メルロ＝ポンティ自身が下線を付した箇所、形而上学的意識の第二程度ないし高度な認識、つまり「為すこと (=せしめること)の単純性において」、「反対するものの同一性を認識すること」という部分である。

従前の話を概観するために、便宜上、次のような論証を組み立てよう。

- 1) なぜ意識があるのか。それは、認識があるからである。
- 2) 何の認識なのか。それは、反対するものの同一性についての認識である。
- 3) この同一性 (identité) とは何か。これは、論理学上の原理として認められた自同律における自同ではなく、反対するものを同一化することである。

4) この同一化とは何か。それは、反対するもの (contraires) の共存をなすような、除去できない豊かな矛盾である。

5) この矛盾はどこに起こるのか。それは「為すことの単純性において (dans)」行われる、ということを指摘すべきである。為すことは、豊かな矛盾の起こるところとして定義される。為すことが意識のあるところであるのだから、形而上学的な意識は、無意識的な作用ないし行為ではあるまい。

「なすことにおいて」といっても、その言い方は方法論的に、説明、理解、保証、正当化といったものになり得るのか。なすところは、最上な原因 (神)、充足理由、権利上の正当等のお陰で成立するのではない。それはむしろ、無上の実践的な証として、為す所として、字を逆にすれば「所為」のような現実的なものになる。「年の所為か疲れやすい」と言うような「しごと」(travail) ないし「さび」という意味において、「為す所」である。それは、メルロ＝ポンティが言うマチエール (matière) を考えるために興味深い。また、同音の「せい」(所為) は、「せい」(生) の奥義なのか。これらの問題を別の機会で論じたい。

本題に戻ろう。従って、形而上学的意識の本質は、認識、生、同一、矛盾、遂に、為すこと、ところといった概念の使用によって徹底化される。要するに、生から為すまで、驚きから同一の認識まで、意識の深化が見られるのである。

矛盾という概念から言えば、生 (の認識) は矛盾 (の認識) に席を譲り、

生き生きとした矛盾が現れる。また、生は「為すこと」ないし「為すところ」に導くので、生き生きとした矛盾は豊かになる。

生きる (vivre) とはフェール (faire) だ (Quand vivre c'est faire)

この第三の解決が、生きることの現象学という枠組みにおいて決然として行われる。ここで、生きるとはなにか。それは、何かの課題についての体験 (vécu)、意味としての生命 (das Leben)、生命体 (le vivant) の生存 (survie)、それに純粹であれ永遠であれ、無限生ないし絶対生 (la vie) とは一致しない。それはむしろ、他者、世界、言語、何よりも積極的に矛盾することを、実践的な意識において生きる働きである。

では、生きるとは何か。以上に触れたように、それは働きであり、より精密に言えば「なすこと (faire)」という働きと関連する。しかし、なすこと自体は何か。

『論理学的研究』のフッサールは、体験の概念を心理学の偏見から純化しようとした時¹²⁵⁾、体験を意識作用 (Akt) の複合としてしか定義しなかった¹²⁶⁾。対照的に、メルロ＝ポンティは、サルトルとバルクソン¹²⁷⁾ のような二つの源泉から考えを汲み、生きるとは、作用や行為 (Tun) 等に還元できない、つくる・なすこと (faire) である、ということを主張する。

一番激烈な現象を矛盾する所まで生きる能力は、生き続け、それを乗り越え、一掃することではなく、その現象によって何かを作ることを意味する (en faire quelque chose)。「フェール (faire)」は、現象する (erscheinen) よりも実現する (réaliser) ことであるからこそ、我々を現象学の境界線まで連れてくれる。漢字で記してみれば、「なす」とは「生す・為す・成す」ことである。生の本質は、作ることにあるから、「生きる」が「生す」になる。

その意味で、この形而上学は、オートポイエーシス (autopoiesis)¹²⁸⁾、またその神経科学¹²⁹⁾ への適用等に関係ではない。しかし、オート・ポイエー

シスを巡る一切の理論は、「オート、自己 (auto)」と並びに、「ポイエシス (ποίησις/poiesis)」を前提しており、こうした概念の意味を明らかにしなければならない。「自己とは何か」だけではなく、「ポイエン (ποιεῖν/poieîn) とは何か」、という問いかけに解答する義務がある。後者を解答するために、例えば晩年の西田幾多郎のポイエシス論を動員する必要はないだろう¹³⁰⁾。何よりも先ず、メルロ＝ポンティ自身の解決法がここで有意義であろう。つまり、以上に見たように、ポイエンは、フェールとして理解されている限り、矛盾することを積極的に意識するところとして見なされる。

なお、なぜこの類いの現象学は、ショーペンハウアーの生活意志 (die Wille zum Leben) とは異なる「形而上学」に導く訳なのか。終わりに当たって、形而上学的意識から、形而上学そのものについて論じなければならない。

メルロ＝ポンティによる形而上学自体の根本的な特徴

最後に、メルロ＝ポンティの形而上学を素描したいと思う¹³¹⁾。

- 形而上学の Schicksal (運命) は、ハイデッガーによるその克服 (Überwindung)¹³²⁾、現代の英米形而上学のリバイバルによるその記号化 (symbolization)¹³³⁾、ドゥルーズによるその反復 (répétition) とは違う。その運命は、メルロ＝ポンティにおいて、むしろデカルトからリクールに至るフランス哲学の根本概念である取り返し (reprise) となる¹³⁴⁾。

- 形而上学の Grundbegriff (根本概念) は、存在者ないし存行者 (Seiende/étant)¹³⁵⁾ から離れて、存在すること (Sein/être) また存在そのもの (Seyn/l'Être) にとどまらず、漸く存在させること (faire être) に変身する。まるで「存在」は、その「する」そしてその「させる」ことに移動・飛躍しているとでも言わんばかりなのだ。

- 形而上学の Grundstruktur (根本構造) は、本質 (essentia, Wesen) よりも、静的且つ動的構造ではない構造 - 化 (structuration) となる。

- 形而上学の Grundproblem (根本問題) は、西洋哲学史に渡る真理の優位性によって限定されている誤りよりも、今度はドゥルーズ等に遭う二重化の考えとなる¹³⁶⁾。

- 形而上学の Grundstimmung (根本雰囲気) は、アリストテレスの驚き (θαυμάζειν) として、形而上学的意識の低度のものしか表象しない。

- 形而上学の Grundsatz (根本命題) は、無 - 矛盾律において矛盾というものを拒否する代わりに、高度の形而上学的意識が生きたころの豊かな矛盾、矛盾をなすところ、つまり矛盾することという形を取る。

言うまでもなく、この豊かな矛盾の論理的な姿は、キアスム (chiasme) に他ならない。それは、持続 (ベルクソン)、相互作用 (ロツツェ)、また矛盾的自己同一 (西田幾多郎)、媒介性 (新田義弘¹³⁷⁾) 等とは異なる。メルロ＝ポンティ自身の知覚に従うと、キアスムの式は、「従属的なものが、開かれた新しい次元の空虚のなかへとそのつど転入する (bascule dans le vide)¹³⁸⁾」ことに対応する。つまり、キアスムは、切迫する転覆の交差というような煩雑な仕組みを示す。例えば、「幼児がよろめきながら言語活動に加わり (bascule dans le langage)、これを習得する¹³⁹⁾」、沈黙は、既に何かを発言し、生は何時でも死になり得る、といったライブニツから引き継いだ形而上学的なメカニズム (mécanisme métaphysique) である。

終わりに当たって、メルロ＝ポンティの形而上学 (上記の 4.3) は、生き生きとした知覚 (la perception vivante) の現象学 (上記の 4.1) と、生活世界の存在論 (上記の 4.2) を結ぶものであることが分る。つまり、第 3 の解決法の根本概念であるキアスムは、第 1 と第 2 の解決法に対応する運動 (1. 態度の相互基づけと、2. 世界の再発見) を突き詰めるものであると思われる。その意味で、メルロ＝ポンティにおいては、現象学は形而上学を要求し、形而上学が哲学の言わば血肉として解明されると思われる。

結論

生は、生き物にしか現れない。それは、この生体が僅かに生の意味を持ち、超越論的生に参加する限り、可能である。ただ、そうすることによって、この精神的生自体は、霊肉分離したものになる傾向があり、元々生き物に現れていた生の意味において、もはや生きていない、ということになる。この問題を解決するには、現象学者が生よりも、生きること自体を考察しなければならない。なぜなら、生きることは生き物と生を調和し、生を生き生きさせることにあるからである。生は生物を生き生きさせることにある、生きさせると同時に生きるがままに委ねることにある (faire et laisser vivre)。

黒澤明の『生きる』は、この理論を見事に描写しているだろう。まず、私たちは市役所に勤める課長の顔が忘れられないだろう。彼は、毎日繰り返して資料に押印し、余りにつまらない仕事の所為で、身の不運をかこち、自分自身で生きていないことを感じる。なぜならば、自分が他人を助けられない、相手のために本来的に何もできないことを嘆いているからである。彼は、直接になにも生きることができない、という否定的な出発点にいる。

次に彼は、胃がんの病気の所為で、仕事を辞めて背徳者の小説家と共にスラム街へ繰り出すが、そこでも生きる気持ちを自覚できない。彼はむしろ、同じ職場で働いていた下級職員の女性、彼女に存在する素朴で純粋な生きることの幸せに間接的に触れる。実際、彼女の個人的生は、相対的で期間的であっても、彼を生き生きさせたと言える。彼が彼女に生きさせられた、ということである。そして、彼女は彼に仕事上でなかなか成果を得なかった件、つまり貧民の女性群のために、一つの公園を造る計画を思い出させる。生きるは作ることにあるから、彼は突然、この計画を実施しようとするにおいて、生きるきっかけを掴み、この計画に生きる理由を見つけるが、そこで一度映画の幕が降りる。

最後に、数ヶ月の後、彼の葬式に出席する会社の同僚達は、彼の命に意味

を見つけ、彼の生を生き生きとさせるのである。彼らはこの課長の最後の戦い、つまり自分の余命を知っていた彼が、この公園の計画のために一生懸命尽力したことを、語り合った。その語り合いを通じて実は、彼がこの貧乏人たちを生き生きさせたことから、彼が生きていたことが露になる。彼の人生の意義は、この働きに由来する。よって、本論の結論は、フェールが生場所であるからこそ、生が生きることにある、ということを経験的に立証できると思われる。

注

- 1) 「その自明性こそが謎なのである」 Edmund Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie* (1935-1936), La Hague, Nijhoff, 1954 (*Hua*, VI), § 58, p. 208, E. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央文庫、中央公論新社、2011年、369頁。この翻訳を参照し必要に応じて手を加えている。私の傍点と著者たちの傍点をこのように区別する。
- 2) もちろん、ヘーゲルはすでにある種の生の現象学を試みていたことを思い出そう。M. Dalissier, « La description de la chose chez Hegel », *Hegel*, Paris, Cerf, 2007, p. 335-361 を参照。
- 3) 新田義弘『世界と生命 媒体性の現象学へ』青土社、2001年。とくに「第九章 生命の現象学：その系譜と発展を追って」を参照。
- 4) 河本英夫、佐藤康邦編『感覚 [世界の境界線]』白菁社、1999年を参照。
- 5) Max Scheler, *Wesen und Formen der Sympathie : der 'Phänomenologie der Sympathiegefühle'*, Bern, Francke, 1973. 邦訳：『同情の本質と諸形式：同情感の現象学』青木茂・小林茂訳、白水社、1977年。
- 6) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution* (1912-1928), La Hague, Martinus Nijhoff, 1952 (*Hua*, IV), 『イデー：純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』、第2巻『構成についての現象学的諸研究』立松弘孝・別所良美共訳、みすず書房、2001-2009年。
- 7) *Die Krisis*, *op. cit.*, § 34, p. 127, 邦訳 224 頁。
- 8) *Die Krisis*, *op. cit.*, § 62, p. 219, 邦訳 388 頁。 *Die Krisis*, *op. cit.*, § 59, Beilage XXIII を参照。
- 9) E. Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen*

- Philosophie, drittes Buch: die Phänomenologie und die Fundamente der Wissenschaften* (1913), La Hague, Nijhoff, 1952 (Hua, V). 『イデーン：純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』、第3巻『現象学と諸学問の基礎』渡辺二郎・千田義光共訳、みすず書房、2010年。
- 10) *Die Krisis, op. cit.*, § 62, p. 219, 邦訳 388 頁。
 - 11) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage V, p. 400.
 - 12) « Eine systematische Entfaltung des Stiles dieses Lebens als Weltleben und unserer selbst als darin Lebender », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XXV, p. 500.
 - 13) « unseres gemeinschaftlichen Lebens », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XXV, p. 499-500. 「環境世界としての生活世界」について、*Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution. Texte aus dem Nachlass* (1916-1937), Dordrecht, Springer, 2008 (Hua, XXXIX), p. 151 sq., 335 sq., 385 sq. を参照。邦訳は、M. ダリシエによる。以下、同様。
 - 14) *Die Krisis, op. cit.*, § 34, p. 130, 邦訳 228 頁。「真なる世界」に関しては、*Die Lebenswelt, op. cit.*, p. 673 sq. を参照。
 - 15) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XVII, p. 461.
 - 16) 村田観弥「者にとっての現象学的研究法とは何か」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、7 (1)、2013 年、117-134 頁を参照。
 - 17) 林克樹『奥行の生と世界 — フッサール主観性論の研究 —』晃洋書房、2002 年、71 頁。
 - 18) « in dem letztlich leistenden Leben hat, in welchem ständig die evidente Gegebenheit der Lebenswelt ihren vorwissenschaftlichen Seinsinn hat », *Die Krisis, op. cit.*, p. 131, § 34 d), 邦訳 230 頁。
 - 19) « Sie ist die raumzeitliche Welt der Dinge, so wie wir sie in unserem vor- und außerwissenschaftlichen Leben erfahren », *Die Krisis, op. cit.*, § 36, p. 141, 邦訳 246 頁。
 - 20) Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception* (1945), Paris, Gallimard, 1945, note 1 p. 419. 『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982 年、812 頁(原註 249)。
 - 21) « In der Lebenswelt leben wir bewußtseinsmäßig immer », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XVII, p. 459.
 - 22) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XIX, p. 466.
 - 23) « Hinein-leben », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XX, p. 470.
 - 24) « Leben ist ständig In-Weltgewißheit-leben », *Die Krisis, op. cit.*, §§ 37-38, p. 144, 146, 邦訳 255, 257 頁。
 - 25) *Die Krisis, op. cit.*, § 38, p. 146, 邦訳 257 頁。

- 26) *Die Krisis, op. cit.*, § 66, p. 231, 邦訳 410 頁。このような純粋な経験について、*Die Lebenswelt*, Beilage IV, Nr. 5, *op. cit.*, p. 41 sq. を参照。
- 27) *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 176, 邦訳 316 頁。
- 28) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage V, p. 400.
- 29) *Die Krisis, op. cit.*, § 37, p. 145, 邦訳 254 頁。
- 30) *Ideen I, op. cit.*, § 72, p. 133, 邦訳 (I. 2) 28 頁。
- 31) « Jede originär gebende Anschauung eine Rechtsquelle der Erkenntnis sei, daß alles, was sich uns in der 'Intuition' originär, (sozusagen in seiner leibhaften Wirklichkeit) darbietet, einfach hinzunehmen sei », E. Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie* (1913), La Hague, Nijhoff, 1950 (*Hua*, III), § 24, p. 43. 『イデー：純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』、第 1 卷『純粋現象学への全般的序論』渡辺二郎訳、みすず書房、1979 年、117 頁。
- 32) *Die Krisis, op. cit.*, § 35, p. 140, 邦訳 245 頁。
- 33) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage V, p. 400.
- 34) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage V, p. 399.
- 35) *Die Krisis, op. cit.*, § 35, p. 138-139, 邦訳 242-243 頁。
- 36) *Die Krisis, op. cit.*, § 36, p. 141, note 1, 邦訳 252-253 頁 (原註)。
- 37) *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 176, 邦訳 316 頁。これらの諸構造について、*Die Lebenswelt, op. cit.*, p. 145 sq., 259 sq. を参照。
- 38) *Die Krisis, op. cit.*, § 55, p. 192, 邦訳 343 頁。
- 39) *Die Krisis, op. cit.*, § 36, p. 141, 邦訳 246 頁。
- 40) *Die Lebenswelt, op. cit.*, « Einleitung des Herausgebers », p. XXV.
- 41) *Die Lebenswelt*, Nr. 35, § 2, *op. cit.*, p. 339-345, Beilage XLIX, p. 584-586.
- 42) E. Husserl, *Philosophie als strenge Wissenschaft* (1910-1911), Frankfurt am Main, Klostermann, 1965, p. 55-57, 63-68, 『厳密な学としての哲学』佐竹哲雄訳、岩波書店、1970 年、90-94, 105-114 頁。
- 43) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XVIII, p. 464.
- 44) « Diese Lebenswelt ist nichts anderes als die Welt der bloßen, traditionell so verächtlich behandelten δόξα », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XVIII, p. 465.
- 45) *Die Krisis, op. cit.*, § 73, p. 272, 邦訳 477 頁。
- 46) *Die Krisis, op. cit.*, § 66, p. 222, note 邦訳 393 頁。
- 47) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage V, p. 400.
- 48) *Die Krisis, op. cit.*, § 55, p. 138, 邦訳 341 頁。
- 49) *Ideen I, op. cit.*, §§ 55&85, p. 106, 172, 邦訳 I-I, 238, I-II, 92 頁。
- 50) *Ideen I, op. cit.*, § 89, p. 184, 邦訳 308 頁。

- 51) *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XVII, p. 462.
- 52) *Die Krisis, op. cit.*, § 40, p. 153, 邦訳 271 頁。
- 53) *Die Krisis, op. cit.*, § 43, p. 157, 邦訳 279 頁。
- 54) *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 177, 邦訳 318 頁。
- 55) *Ideen I, op. cit.*, § 150, p. 315, 邦訳 329 頁。
- 56) « Nur durch die Methode der Epoche (der gereinigten Cartesianischen Methode) unterscheidet sich mir das Leben ohne und vor der Epoche, d.h. das natürlich naive Weltleben, von dem reinen Leben als Leben des ego », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage VI, p. 409.
- 57) *Die Krisis, op. cit.*, § 59, p. 214, 邦訳 378 頁。
- 58) « Im Rückgang in die natürliche, ob- schon jetzt nicht mehr naive Einstellung », *Die Krisis, op. cit.*, § 72, p. 267, 邦訳 470 頁。
- 59) « Und wir unsererseits, die wir bisher ständig unsere systematischen Besinnungen in der Umstellung der transzendentalen Epoche vollzogen, können ja jederzeit wieder die natürliche Einstellung restituieren und in dieser nach den lebensweltlich invarianten Strukturen fragen (...) Von der Möglichkeit und Bedeutung einer solchen lebensweltlichen Ontologie auf dem natürlichen Boden, also außerhalb des transzendentalen Interessenhorizontes, haben wir schon gesprochen und werden davon in anderem Zusammenhang noch zu sprechen haben », *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 176, 邦訳 317 頁。強調部はダリシエによる。以下の註 104 を参照。
- 60) « Ich kehre also wieder zurück in die natürliche Einstellung, unter Berufswechsel: als Psychologe auf dem Weltboden meine Arbeit aufnehmend », *Die Krisis, op. cit.*, § 72, p. 263, 邦訳 464 頁。*Die Lebenswelt* という膨大な未刊草稿集には、このような仕事は果たすのである。
- 61) *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 177, 邦訳 318 頁。
- 62) *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 176, 邦訳 317 頁。
- 63) « Prämisse », « für alle Erkenntnisvorhaben der Wesensdeskription der Lebenswelt und der Wesensdeskription der idealisieren den Leistungen, bzw. für die volle Wissenschaftstheorie, die Vor-aussetzung, der Geltungsuntergrund », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage V, p. 399.
- 64) *Die Krisis, op. cit.*, § 51, p. 177, 邦訳 318 頁。
- 65) *Die Krisis, op. cit.*, § 50, p. 175, 邦訳 313 頁。
- 66) « Dieser Boden ist hier die Subjektivität desjenigen Bewußtseinslebens, in dem eine möglich Welt überhaupt als vorhandene sich konstituiert », *Die Encyclopaedia Britannica Artikel*, vierte, letzte Fassung (1927), *Phänomenologische Psychologie* (1925) I, La Hague, Nijhoff, 1962 (*Hua*, IX), p. 291, 『ブリタニカ草稿 現象学の核心』

- 谷徹訳、ちくま学芸文庫、2008年、36頁。
- 67) *Die Krisis, op. cit.*, § 40, p. 153, 邦訳 271 頁。
- 68) *Die Krisis, op. cit.*, § 72, p. 262, 邦訳 462 頁。
- 69) *Die Krisis, op. cit.*, § 73, p. 275, 邦訳 483 頁。
- 70) *Die Krisis, op. cit.*, § 40, p. 153, 邦訳 271 頁。
- 71) E. Husserl, *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge* (1929), La Hague, Nijhoff, 1950 (*Hua*, I), § 8, p. 60, 『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波文庫、岩波書店、2009年、48頁。
- 72) « eine Unendlichkeit des Lebens und Strebens auf Vernunft », *Die Krisis, op. cit.*, § 73, p. 275, 邦訳 484 頁。
- 73) *Die Krisis, op. cit.*, p. 348, 「ヨーロッパの人間性の危機と哲学」『30年代の危機と哲学 E. Husserl・M. Heidegger・M. Horkheimer』清水多吉・手川誠士郎編、平凡社、2009年、95頁。
- 74) *Die Krisis, op. cit.*, § 50.
- 75) *Die Krisis, op. cit.*, § 71, p. 259, 邦訳 455 頁。
- 76) *Die Lebenswelt, op. cit.*, p. 542 sq. Klaus Held, *Lebendige Gegenwart*, La Hague, Nijhoff, 1966, 『生き生きした現在』新田義弘 [ほか] 共訳、北斗出版、1988年を参照。
- 77) « Lebende und Verstorbene in einer nie endgültig abrechenden Ko-existenz – einer philosophisch denkerischen Koexistenz », *Die Krisis, op. cit.*, Beilage XXIV, p. 488, 「精神的共同体において生きており、また行きつづけている哲学者の諸世代」, *Die Krisis, op. cit.*, § 73, p. 273, 邦訳 481 頁。加えて、E. Husserl, *Philosophie als strenge Wissenschaft op. cit.*, p. 70-71、邦訳 118-119 頁を参照。
- 78) « In allem tätigen Leben ihrer Vernunft », *Die Krisis, op. cit.*, § 73, p. 275, 邦訳 483 頁。
- 79) « Das ist das befremdliche, aber evidente und durch unsere jetzige Besinnung nur letztzuklärende Ergebnis der Forschung in der Epoche, daß das natürliche objektive Weltleben nur eine besondere Weise des ständig Welt konstituierenden, des transzendentalen Lebens ist », *Die Krisis, op. cit.*, § 52, p. 179, 邦訳 320 頁。強調部はダリシエによる。
- 80) E. Husserl, *Zur phänomenologischen Reduktion* (1926-1935), La Hague, Nijhoff, 2002 (*Hua*, XXXIV), Text Nr. 20, p. 300.
- 81) 林克樹、前掲書、130 頁。
- 82) *Die Krisis, op. cit.*, § 55, p. 191, 邦訳 343 頁。
- 83) *Die Krisis, op. cit.*, § 40, p. 153, 邦訳 271 頁。
- 84) *Die Krisis, op. cit.*, § 38, p. 147, 邦訳 258 頁。
- 85) M. Dalissier, *L'Hexagone et l'Archipel. Bergson lu par un philosophe japonais. Trois études*, postface de Frédéric Worms, Paris, éditions Kimé, 2015, p. 115 sq.

- 86) E. Husserl, *Ideen I*, § 19, *op. cit.*, p. 36, tr. fr, 65, 邦訳 I-I, 103.
- 87) E. Husserl, *Nachwort zu meinen Ideen zur einer reinen Phänomenologie, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, drittes Buch*, *op. cit.*, p. 139. また、E. Husserl, *Ideen I*, § 75, *op. cit.*, p. 139, 邦訳、I-I, 37 頁を参照。
- 88) ここでの行動というのは、次の論文で論じられている意味においてである。M. Dalissier, « La notion de comportement (*Verhalten*) selon Heidegger », *Revue philosophique de Louvain*, 106/2, 2008, pp. 270-303 を参照。
- 89) Martin Heidegger, *Die Grundprobleme der Phänomenologie* (1919-1920), Frankfurt A. M., Klostermann, 1993, (GA, 58). 『現象学の根本問題』『ハイデッガー全集 58』 虫明茂・池田喬・ゲオルク・シュテングー訳、創文社、2010 年。
- 90) M. Heidegger, *Phänomenologie des religiösen Lebens* (1918-1921), Frankfurt A. M., Klostermann, 1995, (GA, 60).
- 91) M. Heidegger, *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt – Endlichkeit – Einsamkeit* (1929-1930), Frankfurt A. M., Klostermann, 2004, (GA, 29-30), 『形而上学の根本諸概念：世界 有限性 孤独』『ハイデッガー全集 29/30』川原栄峰・セヴェリン・ミュラー訳、創文社、1998 年。後に、メルロ＝ポンティも次の自然を中心にする講義で、生き物の現象学に貢献する、*La Nature. Notes. Cours du Collège de France*, établi et annoté par Dominique Séglaard, Paris, Seuil, 1994. *Nature*, trans. by R. Vallier, Evanston, Northwestern University Press, 2003.
- 92) M. Heidegger, *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)* (1923), Frankfurt A. M., Klostermann, 1988, (GA, 63). 『オントロギー (事実性の解釈学)』『ハイデッガー全集 63』篠憲二・エルマー・ヴァインマイアー・エベリン・ラフナー訳、創文社、1992 年。
- 93) M. Heidegger, « Aus der Erfahrung des Denkens », *Aus der Erfahrung des Denkens* (1910-1970), Frankfurt A. M., Klostermann, 1983 (GA, 13), p. 84, « Seminar in Le Thor 1969 », *Seminare*, Frankfurt A. M., Klostermann, 2005 (GA, 15), p. 335, 344.
- 94) J. ホールデンの意味において。この生の特徴付けに関して、西田幾多郎による生物学の解釈は明解である。Nishida Kitarô, *La science expérimentale suivi de Explications schématiques*, trad. (avec D. Ibaragi), introduction et commentaire de M. Dalissier, Paris, l'Harmattan, 2010 を参照。
- 95) *Die Lebenswelt*, Beilage II, *op. cit.*, p. 23 sq. を参照。
- 96) Michel Henry, « Qu'est-ce que cela que nous appelons la vie ? », *Phénoménologie de la vie I. De la phénoménologie*, Paris, Vrin, 2003, p. 39-57, et « Phénoménologie de la vie », *ibid.*, p. 59-76.
- 97) M. Henry, « Qu'est-ce que cela que nous appelons la vie ? », *op. cit.*, p. 41 sq.
- 98) « Bien que généré dans l'auto-affection de la vie absolue, le Christ co-appartient au procès de cette auto-affection absolue », M. Henry, *C'EST MOI LA VÉRITÉ*, Paris, Seuil,

- 1996, p. 138.
- 99) Joachim Siles i Borràs, *The Ethics of Husserl's Phenomenology*, London, Continuum International Publishing Group, 2010 を参照。
- 100) « Vie sans mort, vie de l'Infini ou sa gloire ; mais vie en dehors de l'essence et du néant » Emmanuel Lévinas, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Paris, Librairie Générale Française, 2007, p. 223, 「死なき生、〈無限者〉の生ないし〈無限者〉の栄光。ただし、この生は存在することと無の外にある」、『存在の彼方へ』合田正人訳、講談社、1999年、324頁。
- 101) « VI. Le philosophe et son ombre » (fin 1958), *Signes, op. cit.*, p. 207, 「哲学者とその影」木田元訳『シーニュ2』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1970年、10-11頁。
- 102) « VI. Le philosophe et son ombre », *op. cit.*, p. 218, 邦訳24頁。「世界の経験の必然的な契機としての肉体の経験」については、*Die Lebenswelt, op. cit.*, p. 603 sq. を参照。
- 103) 反省はむしろ、「主体への対象の現前性の様態について」の反省となる。M. Merleau-Ponty, « II. Sur la phénoménologie du langage » (13 avril 1951), *Signes*, Paris, Gallimard, 1960, p. 115-116, 「言語の現象学について」『シーニュ1』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1969年、145頁。
- 104) « Si le sujet philosophique était une conscience constituante transparente devant laquelle le monde et le langage fussent entièrement explicites comme ses significations et ses objets, n'importe quelle expérience, phénoménologique ou non, suffirait à motiver le passage à la philosophie, et l'exploration systématique du Lebenswelt ne serait pas nécessaire », M. Merleau-Ponty, « II. Sur la phénoménologie du langage », *op. cit.*, p. 116, 「もしも哲学的主体というものが、世界や言語を自分の意味および対象として完全に顕在化されたかたちでも一つ一つの透明な構成意識だったならば、現象学的であると否とを問わず、どんな経験であっても、哲学への移行を動機づけるに十分だということになってしまうだろうし、Lebenswelt の組織立った探察等、不必要だということになってしまうだろう」、邦訳145頁。強調部はダリシエによる。以上の註59を参照。
- 105) Renaud Barbaras, *De l'être du phénomène. Sur l'ontologie de Merleau-Ponty*, Grenoble, Millon, « Krisis », 2001, p. 355-356. *The Being of the Phenomenon: Merleau-Ponty's Ontology*, trans. by T. Toadvine and L. Lawlo, Bloomington, Indiana University Press, 2004, p. 311-312.
- 106) « Les phénoménologues (Scheler, Heidegger) ont raison d'indiquer cette précompréhension qui précède l'inductivité, car c'est elle qui met en question la valeur ontologique du *Gegen-stand*. Mais un retour à la pré-science n'est pas le but. La reconquête du *Lebenswelt*, c'est la reconquête d'une *dimension*, dans laquelle les objectivations de la science gardent elles-mêmes un sens et sont à comprendre comme *vraies* », M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964, p. 236 (note

de février 1959). 「現象学者たち (シェーラ、ハイデッガー) が、帰納性に先だつこの前了解を示唆したのは、正当だった。なぜなら Gegen-stand (対-象、対立して-立つもの) の存在論的価値を問題化させるのは、ほかならぬ前了解だからである。しかし、先-科学への復帰が、目標ではない。Lebenswelt の取り戻しは、科学のおこなうもろもろの客観化 (対象化) が、それらはそれらで意味を保ちそれぞれ真なるものとして了解されうるような、一つの次元の取り戻しなのである」『見えるものと見えざるもの』クロード・ルフォール編、中島盛夫・伊藤泰雄・岩見徳夫・重野豊隆訳、法政大学出版社、1994年、296頁。

- 107) *Die Krisis, op. cit.*, § 72, p. 267, 邦訳 470 頁。
- 108) 上述の *La Nature. Notes. Cours du Collège de France, op. cit.* を参照。
- 109) 『フッサール研究』第6号特集「応用現象学の展開」、資料集、2008年3月を参照。
- 110) Anna-Teresa Tymieniecka (ed.), *The Crisis of Culture, Analecta Husserliana V*, Dordrecht, D. Reidel, 1976.
- 111) « Husserl dans sa dernière philosophie admet que toute réflexion doit commencer par revenir à la description du monde vécu (*Lebenswelt*). Mais il ajoute que, par une 'seconde réduction', les structures du monde vécu doivent être à leur tour replacées dans le flux transcendantal d'une constitution universelle où toutes les obscurités du monde seraient éclaircies », M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception op. cit.*, note 1 p. 419, 邦訳、812 頁 (原註 249)。
- 112) M. Merleau-Ponty, « Le Métaphysique dans l'Homme » (juillet-octobre 1947), *Sens et non-sens*, Paris, Gallimard, 1996, p. 118, n. 1, 「人間における形而上学的なもの」木田元訳『意味と無意味』滝浦静雄 [ほか] 共訳、みすず書房、1983年、註1、141頁。
- 113) « Avoir conscience, c'est constituer, je ne puis donc avoir conscience d'autrui, puisque ce serait le constituer comme constituant, et comme constituant à l'égard de l'acte même par lequel je le constitue. Cette difficulté de principe, posée comme une borne au début de la cinquième *Méditation cartésienne*, elle n'est nulle part levée. Husserl *passé outre* : puisque j'ai l'idée d'autrui, c'est donc que, de quelque manière, la difficulté mentionnée *a été, en fait*, surmontée. Elle n'a pu l'être que si celui qui, en moi, perçoit autrui, est capable d'ignorer la contradiction radicale qui rend impossible la conception théorique d'autrui, ou plutôt (car, s'il l'ignorait, ce n'est plus à autrui qu'il aurait à faire), capable de vivre cette contradiction comme la définition même de la présence d'autrui. Ce sujet, qui s'éprouve constitué au moment où il fonctionne comme constituant, c'est mon corps », « Sur la phénoménologie du langage », *op. cit.*, p. 117, 「意識をもつことが構成することである以上、私には他者意識をもつことはできないわけで、それというもの、そうすることは他者の方を構成者として、私が彼を構成するまさにその行為自体にたいしてさえも構成者として、構成することになるだろうからだ。こうした原理

的な困難は、『デカルト的省察』の第五省察の冒頭で一つの限界として設定されているが、その後どこでも解決されていない。フッサールはやりすぎしてしまう。つまり、私が他者の観念をもっているからには、何らかの仕方では、上記の困難は事実上克服されているわけだ、というのである。だが、それが克服し得たのは、ただ私のうちにあつて他者を知覚している者が、他者の理論的把握を不可能にするような根本的矛盾など無視することができる、あるいはむしろ（というのは、もしも彼がそれを無視するとすれば、彼はもはや他者とはかかわりをもたぬことになってしまうからだが）この矛盾を他者の現存の定義そのものとして生きることができる、そのかぎりでのことにすぎない。構成者として機能しているちょうどそのときに自分を被構成者として体験することの主体、これこそが私の身体なのである」、147頁。

- 114) M. Merleau-Ponty, « Le Métaphysique dans l'Homme », *op. cit.*, p. 118, note 1, 邦訳, 141頁 (註 1).
- 115) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception op. cit.*, note 1 p. 419, 邦訳, 812頁 (原註 249)。
- 116) 「昔、中国の楚の国で、矛と盾とを売っていた者が「この矛はどんなかたい盾をも突き通すことができ、この盾がどんな矛でも突き通すことができない」と誇ったが、「それではお前の矛でお前の盾を突けばどうなるか」と尋ねられてこたえることができなかったという」『大辞泉』小学館。
- 117) M. Merleau-Ponty, *Les aventures de la dialectique*, Paris, Gallimard, 1955, p. 309, 『弁証法の冒険』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1969年、316頁。
- 118) La réflexion phénoménologique « doit révéler *ce qui fait qu'il y a parole, le paradoxe* d'un sujet qui parle et qui comprend. (...) La réflexion n'est plus le passage à un autre ordre qui résorbe celui des choses actuelles, c'est d'abord une *conscience plus aiguë de notre enracinement en elles* », M. Merleau-Ponty, « III. Le philosophe et la sociologie » (juillet 1951), *Signes, op. cit.*, p. 131. 「哲学者と社会学」竹内芳郎訳『シーニュ 1』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1969年、168-169頁。強調部はダリシエによる。
- 119) M. Merleau-Ponty, « Le Métaphysique dans l'Homme », *op. cit.*, p. 115, 邦訳、137頁。私の解釈について、M. ダリシエ「メルロ＝ポンティにおける歴史の知覚」『同志社哲学年報』, *Societas Philosophiae Doshisha*, 2011年3月11日, pp. 53-87と、M. Dalissier, *La métaphysique chez Merleau-Ponty*, Louvain-La-Neuve, Peeters, « Bibliothèque philosophique de Louvain 99 », 2017を参照されたい。
- 120) « Cette reconnaissance d'une vie individuelle qui anime toutes les vies passées et contemporaines et reçoit d'elles toute vie – d'une lumière qui jaillit d'elles à nous contre tout espoir –, c'est la conscience métaphysique... », « Le Métaphysique dans l'Homme », *op. cit.*, p. 115, 邦訳、137頁。
- 121) この概念について、*Le monde sensible et le monde de l'expression, 1953*, Genève,

- MetisPresses, 2011, p. 83, *La Nature*, *op. cit.*, p. 281, *Signes*, *op. cit.*, p. 109, 150, 175-176, 182、邦訳、137、193、229、238 頁を参照。
- 122) Emmanuel Alloa, « La phénoménologie comme science de l'homme sans l'homme », *Tijdschrift voor Filosofie*, 72/2010, p. 79-100, p. 94-95 を参照。
- 123) « ... c'est la conscience métaphysique, à son premier degré étonnement de découvrir l'affrontement des contraires, à son deuxième degré reconnaissance de leur identité dans la simplicité du *faire*. La conscience métaphysique n'a pas d'autres objets que l'expérience quotidienne: ce monde, les autres, l'histoire humaine, la vérité, la culture. Mais, au lieu de les prendre tout faits comme des conséquences sans prémisses et comme s'ils allaient de soi, elle redécouvre leur étrangeté fondamentale pour moi et le miracle de leur apparition », « Le Métaphysique dans l'Homme », *op. cit.*, p. 115, 邦訳、137 頁。
- 124) M. Dalissier, « Consciences et inconsciences métaphysiques chez Merleau-Ponty », *Les études phénoménologiques*, 2, (2018), p. 249-281 を参照。
- 125) *Logische Untersuchungen, Teil V. Über intentionale Erlebnisse und ihre 'Inhalte'*, La Hague, Nijhoff, 1984 (*Hua*, XIX/1), § 2, p. 356.
- 126) « Sagt jemand, ich habe die Kriege von 1866 und 1870 erlebt, so ist das, was in diesem Sinne 'erlebt' heißt, eine Komplexion äußerer Vorgänge, und *das Erleben besteht hier aus Wahrnehmungen, Beurteilungen und sonstigen Akten*, in welchen die Vorgänge zu gegen- ständlicher Erscheinung und öfters zu Objekten einer gewissen, auf das empirische Ich bezogenen Setzung werden », *Logische Untersuchungen, Teil. V. op. cit.*, § 3 p. 361. 強調部はダリシエによる。
- 127) M. Dalissier, *En réalité : Bergson au-delà de la durée*, Paris, Mimésis, « L'œil et l'esprit », 2017 を参照。
- 128) 河本英夫『システム現象学 オートポイエシスの第四領域』新曜社、2006 年を参照。特に、「オートポイエーシス (自己制作)」という特徴付け、25 頁。また、「意識は、みずから何を行っているかを十全に知ることなく行為する」、405 頁等。もちろん、オートポイエーシスは単純な意味での自己形成ではないことを注意に払わなければならない。「実践的行為の領域は、自己自身を形成することだけではなく、行為する自分を調整する働きがある」、453 頁。
- 129) Humberto R. Maturana and Francisco J. Varela, *Autopoiesis and Cognition: the Realization of the Living*, Dordrecht, Reidel, 1980, H. マトゥラーナ、F. バレーラ『知恵の樹：生きている世界はどのようにして生まれるのか』管啓次郎訳、朝日出版社、1987 年を参照。
- 130) 西田幾多郎『経験科学』『図式的説明』、上述のテキストとその解釈を参照。
- 130) この自己触発は、生活世界にある触発ではない。*Die Lebenswelt*, Beilage II, *op. cit.*,

- p. 23 sq. を参照。
- 131) M. Dalissier, « Consciences et inconsciences métaphysiques chez Merleau-Ponty », *Les études phénoménologiques, op. cit.*, を参照。
- 132) M. Heidegger, *Metaphysik und Nihilismus. 1. Die Überwindung der Metaphysik* (1938-1939), Frankfurt A.M., Klostermann, 1999 (GA, 67) を参照。
- 133) Frédéric Nef, *Qu'est-ce que la métaphysique*, Paris, Gallimard, 2004.
- 134) M. Dalissier, 「デカルトにおける「取り返し」の概念」『文化學年報』第六十二輯、同志社大学文化学会、2013年3月15日、pp. 97-112、また前掲書 M. ダリシエ 「メルロ＝ポンティにおける歴史の知覚」を参照。
- 135) ハイデッガーが言う「das Seiende」は、日本そして中国では、「存在者 (cúnzàizhě)、台湾では「存有者 (cúnyǒuzhě) と翻訳されていることは興味深い。要するに、das Seiende は、単に存在するもの (物、者) であるだけでなく、存在を持つ・有つことである。この課題は、中世哲学において、「存在する esse」という助動詞を、「もつ」つまり「所持する・所有する (habere)」という助動詞で代用することによって、「存在をもつこと (esse habere)」、存在の程度 (degrés d'être) という理論を成り立たせている。トマス・アクィナス『存在と本質』を参照。
このプロセスを手短く文法的に分析しよう。1) 先ず、このように、存在は、自体のなすことを喪失し、換言すれば、そのなすことが言わば中位化せられてしまう (名詞化：存在する→存在)。2) 次に、この中位化された存在は、言わばもつの対象になる。3) 最後に、このなす・することは、もつに付け加えることができる (もつ→所持する・所有する)。
- 136) この二重化 (doublage) の問題は、当然の相違点は別として、ベルクソンの幻象 (mirage)、ハイデッガーの先頭 (Vordrang)、ドゥルーズの二重化 (doublage) において現れる。
- 137) 新田義弘『世界と生命 媒体性の現象学へ』前掲書を参照。
- 138) « Le subordonné chaque fois bascule dans le vide d'une nouvelle dimension ouverte », M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible, op. cit.*, p. 319 (note de novembre 1960)、邦訳、440 頁。
- 139) « un enfant bascule dans le langage, apprend », M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible, op. cit.*, p. 287 (note de janvier 1960)、邦訳、384、頁。

文献目録 (原文とその邦訳ないし英訳)

- ALLOA, Emmanuel, « La phénoménologie comme science de l'homme sans l'homme », *Tijdschrift voor Filosofie*, 72/2010, p. 79-100.
- BARBARAS, Renaud, *De l'être du phénomène. Sur l'ontologie de Merleau-Ponty* [『現象の存在：メルロ＝ポンティの存在論について』], Grenoble, Millon, « Krisis », 2001.

- 英訳: *The Being of the Phenomenon: Merleau-Ponty's Ontology*, translated by Ted Toadvine and Leonard Lawlo, Bloomington, Indiana University Press, 2004.
- BERNET, Rudolf, *La vie du sujet. Recherches sur l'interprétation de Husserl dans la phénoménologie* [『主観の生: 現象学におけるフッサールについての解釈』], Paris, Presses universitaires de France, « Épipiméthée », 1994.
- R. ベルネ、I. ケルン、E. マールバッハ著『フッサールの思想』千田義光・鈴木琢真・徳永哲郎訳、理想社、1994年。

DALISSIER, Michel

- « La description de la chose chez Hegel » [『ヘーゲルにおける物の記述』], *Hegel*, dirigé by Maxence Caron, Paris, Cerf, Coll. « Cahiers d'Histoire de la Philosophie », 2007, p. 335-361.
- « La notion de comportement selon Heidegger » [『ハイデッガーによる行動の概念』], *Revue philosophique de Louvain*, Louvain-la-Neuve, Université Catholique de Louvain, mai 2008, tome 106/no. 2, p. 270-303.
- 「デカルトにおける「取り返し」の概念」『文化學年報』第六十二輯、同志社大学文化学会、2013年3月15日、pp. 97-112.
- 「メルロ＝ポンティにおける歴史の知覚」『同志社哲学年報』山形頼洋教授追悼特別号、Societas Philosophiae Doshisha, 2011年3月11日、pp. 53-87.
- *L'Hexagone et l'Archipel. Bergson lu par un philosophe japonais. Trois études* [『六角形と列島: 日本人哲学者が読んだベルクソン — 三つの研究』], postface de Frédéric Worms, Paris, éditions Kimé, Coll: « Transhumanisme », 2015.
- “The Philosophical Method of Merleau-Ponty”, William Sweet and Cristal Huang (ed.), *Care of Self and Meaning of Life: Asian and Christian Reflections*, (Washington, D.C.: Council for Research in Values and Philosophy, 2016), 91-108.
- « Consciences et inconsciences métaphysiques chez Merleau-Ponty » [『メルロ＝ポンティにおける形而上学的意識、無意識』], *Les études phénoménologiques*, 2 (2018), p. 249-281.
- *La métaphysique chez Merleau-Ponty* [『メルロ＝ポンティにおける形而上学』], Louvain-La-Neuve, Peeters, « Bibliothèque philosophique de Louvain 99 », 2017.
- *En réalité : Bergson au-delà de la durée* [『実は／実在中で: 持続の彼方のベルクソン』], Paris, Mimésis, « L'œil et l'esprit », 2017.

林克樹『奥行の生と世界 — フッサール主観性論の研究 —』晃洋書房、2002年。

HEIDEGGER, Martin

- *Aus der Erfahrung des Denkens* (1910-1970), herausgegeben von Hermann Heidegger, Frankfurt Am Main, Vittorio Klostermann, 1983 (GA, 13).
- *Seminare*, herausgegeben von Curd Ochwadt, Frankfurt A. M., Klostermann, 2005 (GA,

- 15).
- *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt – Endlichkeit – Einsamkeit* (1929-1930), herausgegeben von Friedrich-Wilhelm von Hermann, Frankfurt A.M., Klostermann, 2004, (GA, 29-30).
 - 邦訳：『形而上学の根本諸概念：世界 有限性 孤独』『ハイデッガー全集 29/30』川原栄峰・セヴェリン・ミュラー訳、創文社、1998年。
 - *Die Grundprobleme der Phänomenologie* (1919-1920), herausgegeben von Hans-Helmuth Gander, Frankfurt A. M., Klostermann, 1993, (GA, 58).
 - 『現象学の根本問題』『ハイデッガー全集 58』虫明茂・池田喬・ゲオルク・シュテンガー訳、創文社、2010年。
 - *Phänomenologie des religiösen Lebens* (1918-1921) [『宗教的生の現象学』], herausgegeben von herausgegeben von Matthias Jung, Thomas Regehly und Claudius Strube, Frankfurt A. M., Klostermann, 1995, (GA, 60).
 - *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)* (1923), herausgegeben von Käte Bröcker-Oltmanns, Frankfurt A. M., Klostermann, 1988, (GA, 63).
 - 『オントロジー（事実性の解釈学）』『ハイデッガー全集 63』篠憲二・エルマー・ヴァインマイアー・エベリン・ラフナー訳、創文社、1992年。
 - *Metaphysik und Nihilismus. 1. Die Überwindung der Metaphysik* (1938-1939). 2. *Das Wesen des Nihilismus* (1946-1948), herausgegeben von Hans-Joachim Friedrich, Frankfurt A. M., Klostermann, 1999 (GA, 67).

HELD, Klaus, *Lebendige Gegenwart: die Frage nach der Seinsweise des transzendentalen Ich bei Edmund Husserl, entwickelt am Leitfaden der Zeitproblematik*, The Hague, Nijhoff, 1966, 『生き生きした現在：時間の深淵への問い』新田義弘 [ほか] 共訳、北斗出版、1988年。

HENRY, Michel

- *C'EST MOI LA VÉRITÉ. Pour une philosophie du christianisme* [『私は真理である — キリスト教の哲学のために』] Paris, Seuil, 1996.
- « Qu'est-ce que cela que nous appelons la vie ? » [『我々が言う生とは何か』], *Phénoménologie de la vie I. De la phénoménologie*, Paris, Vrin, « Epiméthée », 2003, p. 39-57.
- « Phénoménologie de la vie » [『生の現象学』], *Phénoménologie de la vie I. De la phénoménologie*, Paris, Vrin, « Epiméthée », 2003, p. 59-76.

HUSSERL, Edmund

- *Logische Untersuchungen, zweiter Band, erster Teil. I-V. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis* (1900-1901, 1913, 1921), *Teil V. Über intentionale Erlebnisse und ihre 'Inhalte'* [『論理学的研究 5』], herausgegeben von Ursula Panzer, La Hague, Nijhoff, 1984 (*Husserliana*, Band XIX/1, *Hua*, XIX/1).

- *Philosophie als strenge Wissenschaft* (1910-1911), Frankfurt am Main, Klostermann, 1965.
- 『厳密な学としての哲学』佐竹哲雄訳、岩波書店、1970年。
- *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie* (1913), herausgegeben von Walter Beigel, La Hague, Martinus Nijhoff, 1950 (*Hua*, III).
- 『イデー：純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』、第1巻『純粹現象学への全般的序論』渡辺二郎訳、みすず書房、1979年。
- *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution* (1912-1928), herausgegeben von Marly Beigel, La Hague, Martinus Nijhoff, 1952 (*Hua*, IV).
- 『イデー：純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』、第2巻『構成についての現象学的諸研究』立松弘孝・別所良美共訳、みすず書房、2001-2009年。
- *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, drittes Buch: die Phänomenologie und die Fundamente der Wissenschaften* (1913), herausgegeben von Marly Beigel, La Hague, Martinus Nijhoff, 1952 (*Hua*, V).
- 『イデー：純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』、第3巻『現象学と諸学問の基礎』渡辺二郎・千田義光共訳、みすず書房、2010年。
- *Die Encyclopaedia Britannica Artikel*, vierte, letzte Fassung (1927), *Phänomenologische Psychologie* (1925), herausgegeben von Walter Biemel, La Hague, Nijhoff, 1962 (*Hua*, IX), p. 291, 『ブリタニカ草稿 現象学の核心』谷徹訳、ちくま学芸文庫、2008年。
- *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge* (1929), herausgegeben und eingeleitet von Stephan Strasser, La Hague, Nijhoff, 1950 (*Hua*, I).
- 『デカルトの省察』浜渦辰二訳、岩波文庫、岩波書店、2009年。
- *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie* (1935-1936) herausgegeben von Walter Biemel, La Hague, Nijhoff, 1954 (*Hua*, VI).
- 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央文庫、中央公論新社、2011年。
- « Die Krisis des europäischen Menschentums und die Philosophie », *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie* (1935-1936) herausgegeben von Walter Biemel, La Hague, Nijhoff, 1954 (*Hua*, VI), p. 314-348.
- 「ヨーロッパの人間性の危機と哲学」『30年代の危機と哲学 E. Husserl・M. Heidegger・M. Horkheimer』清水多吉・手川誠士郎編、平凡社、2009年、22-99頁。

- *Zur phänomenologischen Reduktion. Texte aus dem Nachlass* (1926-1935) [『現象学的還元について』], herausgegeben von Sebastian Luft, La Hague, Nijhoff, 2002 (*Hua*, XXXIV).
- *Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution. Texte aus dem Nachlass* (1916-1937) [『生活世界』], herausgegeben von Rochus Sowa, Dordrecht, Springer, 2008 (*Hua*, XXXIX).
- 『フッサール研究』第6号特集「応用現象学の展開」平成19年度科学研究費補助金(基盤研究B)「『いのち・からだ・こころ』をめぐる現代問題への応用現象学からの貢献の試み」、資料集、2008年3月。

河本英夫『システム現象学 オートポイエシスの第四領域』新曜社、2006年。

- 河本英夫、佐藤康邦編『感覚 [世界の境界線]』白菁社、1999年。

LÉVINAS, Emmanuel, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Paris, Librairie Générale Française, « Le livre de poche », 2007.

- 『存在の彼方へ』合田正人訳、講談社、1999年。

MATURANA, Humberto R., VARELA FRANCISCO J., *Autopoiesis and Cognition: the Realization of the Living*, with a preface to *Autopoiesis* by Sir Stafford Beer, Dordrecht, Reidel, Boston Studies in the Philosophy of Science, 1980.

- H. マトゥラーナ、F. バレレー『知恵の樹：生きている世界はどのようにして生まれるのか』管啓次郎訳、朝日出版社、1987年。

MERLEAU-PONTY, Maurice

- *Phénoménologie de la perception* (1945), Paris, Gallimard, « nrf », 1945.
- 『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年。
- *La Nature. Notes. Cours du Collège de France suivi des résumés de cours correspondants de Merleau-Ponty*, établi et annoté par Dominique Ségлар, Paris, Seuil, « Traces écrites », 1994.
- *Nature: Course Notes from the Collège de France*, compiled and with notes by Dominique Ségлар, translated from the French by Robert Vallier, Evanston, Northwestern University Press, 2003.
- « Le Métaphysique dans l'homme » (juillet-octobre 1947), *Sens et non-sens*, Paris, Gallimard, « nrf », 1996, p. 102-119.
- 「人間における形而上学的もの」木田元訳『意味と無意味』滝浦静雄 [ほか] 共訳、みすず書房、1983年、121-143頁。
- « II. Sur la phénoménologie du langage » (13 avril 1951), *Signes*, Paris, Gallimard, « nrf », 1960, p. 105-122.
- 「言語の現象学について」竹内芳郎訳『シーニュ1』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1969年、131-155頁。

- « III. Le philosophe et la sociologie » (juillet 1951), *Signes, op. cit.*, p. 123-142.
- 「哲学者と社会学」竹内芳郎訳『シーニュ 1』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1969年、157-181 頁。
- « VI. Le philosophe et son ombre » (fin 1958), *Signes*, Paris, Gallimard, « nrf », 1960, p. 201-228.
- 「哲学者とその影」木田元訳『シーニュ 2』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1970年、157-181 頁。
- *Les aventures de la dialectique*, Paris, Gallimard, « nrf », 1955.
- 『弁証法の冒険』竹内芳郎 [ほか] 訳、みすず書房、1969年。
- *Le visible et l'invisible*, texte établi par Claude Lefort, accompagné d'un avertissement et d'une postface, Paris, Gallimard, « Bibliothèque des idées, nrf », 1964.
- 『見えるものと見えざるもの』クロード・ルフォール編、中島盛夫・伊藤泰雄・岩見徳夫・重野豊隆訳、法政大学出版局、1994年。

村田観弥「実践者にとっての現象学的研究法とは何か：対人支援における「理解」のための研究者態度と方法論の検討」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、7 (1)、2013年、117-134 頁。

NEF, Frédéric *Qu'est-ce que la métaphysique* [『形而上学とは何か』] Paris, Gallimard, 2004.
 NISHIDA, Kitarô, *La science expérimentale suivi de Explications schématiques* [西田幾多郎『経験科学』『図式的説明』の共訳], traduction (avec Ibaragi Daisuké), introduction, présentation et commentaire de Michel Dalissier, Paris, l'Harmattan, Coll. : « L'ouverture philosophique », 2010, 401 pages.

新田義弘『世界と生命 媒体性の現象学へ』青土社、2001年。

SCHELER, Max, *Wesen und Formen der Sympathie : der 'Phänomenologie der Sympathiegefühle', Wesen und Formen der Sympathie ; Die deutsche Philosophie der Gegenwart*, herausgegeben mit einem Anhang von Manfred S. Frings, Bern, Francke, 1973.

- 『同情の本質と諸形式：同情感の現象学』青木茂・小林茂訳、白水社、1977年。

SILES I BORRÁS, Joachim *The Ethics of Husserl's Phenomenology. Responsibility and Ethical Life*, London, Continuum International Publishing Group, « Continuum Series in Continental Philosophy », 2010.

TYMIENIECKA, Anna-Teresa (ed.), *The Crisis of Culture. Steps to Reopen the Phenomenological Investigation of Man, Analecta Husserliana*, volume V, Dordrecht, D. Reidel, 1976.